

東洋學叢

金春禪竹の能樂論に見る禪の影響

—六輪一露説を中心に—(下)

伊吹 敦(1)

ラーガのランジャナ(心を彩る)作用

清水 乞(119)

第六格の意味と用法

—Siddhantakaumudi, Karakaparakarana 訳註(8)—

菅沼 晃(174)

東洋大学文学部紀要第55集

印度哲学科篇

XXVII

研究室報告

- ① 本年度の本学役職としては、森章司教授が新たに文学部長に就任した。また、菅沼晃教授、川崎信定教授は、それぞれ引き続き評議員、東洋学研究所長を担当した。
- ② 本年度より新たに渡辺章悟助教授が大学院の授業の担当となり、また、竹村牧男講師が昨年度をもって退任した田村晃祐教授の後を襲って学部の子(日本仏教)と大学院の授業を担当した。
- ③ 非常勤講師として、長年に亘って本学科の運営にご協力頂いた五十嵐明宝氏が、ご病気のため前期末をもって退任された。そのため、後期の「浄土教の思想と文化」の授業は、急遽、石井義長氏にお願いした。五十嵐氏が、その後、間もなくしてご逝去されたことは、学科としても非常に遺憾なことであった。
- ④ 本年度も学科として新入生歓迎行事を充実させることに意を注いだ。特に、ゼミ連絡会議の発案のもと、平成十三年四月八日に「フレッシュユマンキャンプ・イン・ワンデー」と銘打って行われた新入生歓迎球技大会では最高の盛り上がりを見せ、多くの参加者を得て、新入生同士、あるいは新入生と上級生の交流を促すという点で、大いに効果をあげることができた。
- ⑤ 本年度も「ゼミ活性化対策」としてベルギー王立アカデミー、ケント大学教授の Charles Willemson 教授をお招きして「北西インドにおける仏教部派の展開―説一切有部を中心に」と題して講演会を開催した。専門的でかなり高度の内容であったが、学生たちの好奇心を駆り立てたようであった。
- ⑥ 本年度も大学院の研究発表会を前期(六月十四日)と後期(十二月八日)に一度づつ開催した。前期の発表者は甲田烈(D3)、奥野理子(M2)、熊田順正(D3)、出野尚紀(D2)、植村豪(D1)の五人、後期の発表者は圓井力(D1)、松原茂樹(D1)、今野道隆(M2)、富田雅史(D2)、石塚良哉(M2)、出野尚紀(D2)、渡邊純子(D3)の七人であった。
- ⑦ 本年度の朝霞校舎でのティーチング・アシスタントは、大学院後期課程の出野尚紀君と植村豪君が担当した。
- ⑧ 本年度の卒業論文・卒業制作の提出者は、I部が五十五名、II部が十六名であった。本年度の優秀論文に対する褒賞は、以下の通りである。田村芳朗奨学基金受賞者―植木夕紀子(I部)、佐藤エリカ(II部)。勸学奨学基金受賞者―中西祥子(I部)、柳井猛晶(II部)。校友会学生研究奨励基金受賞者―但野沙矢香(I部)、木村伊沙子(II部)、今野道隆(大学院)

平成十三年度業績（平成十三年一月～十二月）

菅沼 晃

〈訳書〉

『グライ・ラマ 智慧の眼をひらく』（単訳、春秋社、B 6判、平成十三年七月十六日、二七四頁）

〈論文〉

「第五格の意味と用法—Siddhantakamudi Karakaprakara 訳註（7）」（単著、「東洋学論叢」第二六号）、「東洋大学文学部紀要」第五四集（印度哲学科篇）、平成十三年三月三〇日、A 5判、一八六～二一四頁）

「日本近代仏教の基礎を築いた人々（変革期の仏教Ⅰ）」（単著、「大法論」九月号、平成十三年九月一日、A 5判、二九一～二九七頁）

〈その他〉

「ヒンドゥー教—ヴィシュヌの化身」（単著、「ブッダ・釈尊とは」大法論閣、平成十三年二月十日、B 6判、一九三～二〇〇頁）

「日本仏教の重大事件（第五章）」（単著、「わが家の仏教・なるほど事典」実業之日本、平成十三年二月二十一日、B 6判、一七五～二〇四頁）

「大麦とサルと人間—生きているものの仲間」（単著、「在家仏

教」八月号、平成十三年八月一日、B 6判、六～八頁）

「仏典のことは19」（単著、「宝積」第十九号、平成十三年七月一日、B 6判、一四～一六頁）

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会理事／日本宗教学会評議員／日本仏教学会／禅学研究会／日本近代仏教史研究会

〈調査活動〉

「中国内モンゴル自治区の仏教寺院の調査」（海外研究費による研究、平成十三年八月二十二日～九月二日、フフホト、バオトウ、アルシャン盟などにて寺院の現状と寺院所蔵のモンゴル語訳経典を調査し、活仏とも会見した）

「東洋思想における心身観」（平成十三年度科学研究費による研究、研究代表者）

「日本における死の受容—文学・仏教・キリスト教信仰にみる看取りの様態」（平成十三年度科学研究費による研究、研究分担者（研究代表者：高城功夫））

〈教育活動〉

学内担当科目

学部 インド宗教史（朝霞、Ⅰ部／白山、Ⅱ部）

インド古典講読①（朝霞、Ⅰ部）

インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）

大学院 サンスクリット文献研究・インド哲学研究指導Ⅰ

(前期)

インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅰ

(後期)

市民大学等

日曜講義「インドの哲学と宗教入門」(平成十三年一月〜十

二月、十回、東洋大学)

その他

インド思想研究会顧問(月一回の研究会で Rāmāyana 第

一篇第十三章を講読)

〈社会活動〉

庭野平和財団評議員/大法輪石原育英会理事/宝積比較宗

教・文化研究所顧問/東洋大学校友会会長

講演「心に残る釈尊の物語」(仏教文化講座、平成十三年六月

二十三日、東京・築地本願寺)

講演「シルクロードの現状―バーミアンの仏像破壊をめぐつ

て」(平成十三年七月二十三日、東京・高尾山薬王院)

講演「哲学のすすめ―井上円了の思想と現代」(東洋大学校友

会愛媛県支部七十周年記念講演会、平成十三年九月八日、

愛媛県・松山市)

講演「ブラーナの発見と展開―アタルヴァヴェーダからウパ

ニシャッドへ」(日本ヨーガ光臨会全国大会、平成十三年九

月二十九日、京都)

講演「人と宗教―人類最古の哲学と現代人」(栄光カウンセリ

ングマインド研究会、平成十三年十一月十三日、東京)

講演「般若心経に学ぶ」(彩の国生きがいの大学、平成十三年十

二月六日、埼玉県・鷲宮町)

講演「共生の時代―生命の尊さについて考える」(西那須町仏

教会、平成十三年十二月十一日、栃木県・西那須町)

〈大学・学部管理・運営〉

学校法人東洋大学評議員

清水 乞

〈論文〉

「Kumbhakara 作: Rasikapriya に見られる歌謡―Das

avatarakritidhavalaprabandha について」(単著、「東洋

学論叢」第二六号)、「東洋大学文学部紀要」第五四集(印度

哲学科篇)、平成十三年三月三十日、A5判、一六七―一

八五頁)

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会評議員/密教図像学会評議員/日本仏

教学会

〈調査活動〉

「東洋思想における心身観」(平成十三年度科学研究費による

研究、研究分担者(研究代表者:菅沼晃)

「日本における死の受容―文学・仏教・キリスト教信仰にみ

る看取りの模様」(平成十三年度科学研究費による研究、研究分担者〈研究代表者…高城功夫〉)

〈教育活動〉

学内担当科目

学部 サンスクリット文献講読①・②

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

大学院 仏教学特論Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ(前期)

インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ

(後期)

〈大学・学部の管理・運営〉

大学院文学研究科仏教学専攻主任/印度哲学科第Ⅱ部主任

森 章司

〈著書〉

『仏教的もの見方―仏教の原点を探る』(単著、国書刊行会、

平成十三年三月二十日、A5判、一二二頁)

〈論文〉

「在家阿羅漢について」(単著、「東洋学論叢」第二六号〈東

洋大学文学部紀要〉第五四集(印度哲学科篇)、平成十三年三月三十日、A5判、四九〜七〇頁)

「科学と仏教」(単著、「東洋学術研究」第四〇巻第一号、平成

十三年五月三十日、A5判、六三〜八〇頁)

「人は自らの意思でこの世に生まれてくる―初期仏教の立場

から」(単著、「平和と宗教」第二〇号、平成十三年十二月十日、A5判、四〜一九頁)

〈その他〉

「今は父子の義はあるべからず―親鸞」(単著、「月例講話集」

第二一集、大倉精神文化研究所、平成十三年七月十八日、

新書判、一四八〜一八九頁)

「no problem」(単著、「TOYO UNIVERSITY (東洋大学校

友会報)」第二〇九号、平成十三年十一月一日、B5判、三

頁)

〈学会活動〉

所屬学会ならびに役職

日本印度学仏教学会理事/地域研究学会理事/日本宗教学

会/日本仏教学会/比較思想学会/仏教思想学会

〈調査活動〉

「雨期の仏教遺跡調査」(中央学術研究所の委託研究、平成十

三年八月一日〜三十日、インド・ニューデリーほかにて現

地研究者と意見交換などを行う)

「東洋思想における心身観」(平成十三年度科学研究費による

研究、研究分担者〈研究代表者…菅沼晃〉)

「日本における死の受容―文学・仏教・キリスト教信仰にみ

る看取りの模様」(平成十三年度科学研究費による研究、研

究分担者〈研究代表者…高城功夫〉)

〈教育活動〉

学内担当科目

学部 仏教学概論(朝霞Ⅰ部/白山Ⅱ部)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

大学院 初期仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ(前期)

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ(後期)

〈大学・学部の管理・運営〉

文学部長/東洋学研究所研究員

川崎信定

〈論文〉

「仏とは」(単著、大法輪閣編集部編『仏教思想を読む―仏教の基本を知るために』大法輪閣、平成十三年九月十日、B 6判、八〇―一四四頁)

「チベット大蔵経諸版成立史研究序説(資料翻訳篇)」(単著、「東洋学論叢」第二六号〈東洋大学文学部紀要〉第五四集(印度哲学科篇)、平成十三年三月三十日、A5判、七一―九五頁)

「バルドゥ(中有)を設定する意味―『チベットの死者の書』を通して考える」(単著、『平和と宗教』第二〇号、平成十三年二月一〇日、A5判二〇―三五頁)

〈書評〉

「ジョンナサン・A・シルク著『チベット語訳(般若心経)2系 統校訂テキスト』」(単著、「東洋学報」第八二卷第三号、平

成十三年一月三十一日、A5判、二―七頁)

〈その他〉

「東洋大学東洋学研究所」(「東洋」の名を冠した研究所)(単著、「TOYO UNIVERSITY(東洋大学校友会報)」第二〇六号、平成十三年二月一日、B5判、一―三頁)

「チベットの死者の書」からのメッセージ」(単著、東洋大学東洋学研究所事業報告、研究発表例会十一月二十五日、「東洋学研究」第三八号、平成十三年三月三〇日、一三九―一四〇頁)。

「インド哲学・仏教学・チベット密教」(単著、「私大密雪」第六二号、平成十三年四月十七日、B5判、一―一三頁)。「到れるものよ、到り着きたるものよ、さとりのよ(真理のことば)」(単著、「Sawa」第四二号、平成十三年四月二十日、B5判、一八―一九頁)

〈学会活動〉

所属学会ならびに役職

日本西蔵学会委員/仏教思想学会理事/日本宗教学会理事(日本宗教学会賞審査委員長)/日本仏教学会理事/比較思想学会評議員/日本印度学仏教学会

〈調査活動〉

「東洋思想における心身観」(平成十三年度科学研究費による研究、研究分担者(研究代表者・菅沼晃))

「日本における死の受容―文学・仏教・キリスト教信仰にみ

る看取りの様態」(平成十三年度科学研究費による研究、研究分担者(研究代表者・高城功夫))

△教育活動▽

学内担当科目

学部 宗教学概論(白山、乗入れ)

仏教思想論Ⅱ(白山、乗入れ)

チベット文献講読(白山、乗入れ)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

大学院 仏教学演習Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ(前期)

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ(後期)

△社会活動▽

財団法人東方学会評議員/財団法人東方研究会理事/東洋学

報(東洋文庫)編集委員

講演「『チベットの死者の書』と現代日本」(平成十三年二月

十二日、ポタラ・カレヅジ(チベット仏教普及協会東京セ

ンター)

講演「人間の知とそれを超える智慧―一切智研究の意味」(第

一八一回早稲田大学東洋哲学会特別講演、平成十三年六月

九日、早稲田大学)

講演「死を基点として捉えた生とは―『チベットの死者の書』

からのメッセージ」(第三六八回一隅会例会(財団法人日本

能率協会)、平成十三年八月二十三日、芝・パークホテル)

講演「『チベットの死者の書』と日本の四十九日法要」(伊勢

崎佐波仏教会講演会、平成十三年十月十一日、伊勢崎市公民会館)

講演「般若心経から見た仏教の思想」(真言宗豊山派教師研修

会、平成十三年十一月七日、音羽・真言宗豊山派宗務所)

講演「インド大乘仏教とチベット仏教」(財団法人東方研究

会・東方学院公開講義、平成十三年十月一日、二十二日、

十一月十九日、湯島聖堂)

△大学・学部の管理・運営▽

東洋学研究所長

橋本泰元

△論文▽

「カヒールの言語について」(単著、「東洋学論叢」第二六号

△東洋大学文学部紀要」第五四集(印度哲学科篇)、平成

十三年三月三十日、A5判、一〇一〜一一九頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会/日本南アジア学会/日本宗教学会/

日本仏教学会

△調査活動▽

「東洋思想における心身観」(平成十三年度科学研究費による

研究、研究分担者(研究代表者・菅沼晃))

「日本における死の受容―文学・仏教・キリスト教信仰にみ

る看取りの様態」(平成十三年度科学研究費による研究、研究分担者〈研究代表者・高城功夫〉)

△教育活動▽

学内担当科目

学部 ヒンドゥー教概説(朝霞、Ⅰ部/白山、Ⅱ部)

インド哲学仏教学演習(朝霞、Ⅰ部)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

大学院 インド哲学研究Ⅱ(中世インド思想研究)(前期)

学外担当科目

ヒンディー語(インド言語文化研究)Ⅰ・Ⅱ(大正大学)

中世ヒンディー宗教文学研究(東京外国語大学)

△大学・学部の管理・運営▽

印度哲学科第一部主任/文学部内資格審査委員会委員/東洋学研究所研究所員/四キャンパス意識調査プロジェクト委員

渡辺章悟

△著書▽

「大智度論の物語(三)」(単著、第三文明社、平成十三年六月七日、B40判、一八七頁)

△論文▽

「インド仏教の法滅思想Ⅱ―初期仏教資料をめぐる―」(単著、「東洋学論叢」第二六号)、「東洋大学文学部紀要」第五四集(印度哲学科篇)、平成十三年三月三十日、A5判、

一一五―一三〇頁)

△事典項目執筆▽

「賢劫経」「坐禪三昧経」「達摩多羅禪経」「妙法蓮華経要披提舎」「仏地経論」の各項目(単著、大藏経学術用語研究会編

「仏典入門事典」永田文昌堂、平成十三年六月一日、四六判、計五頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会/日本佛教学会/日本宗教学会/北海道印度哲学仏教学会/仏教思想学会/日本西蔵学会/国際

仏教学会(IABS)

学会における研究発表

「スコイエン・コレクションの『金剛般若経』」(日本印度

学仏教学会第五十二回学術大会、平成十三年六月三十日、東京大学)

「バーミヤーン溪谷から発見された仏典写本群―スコイエン・コレクションとタリバーン」(東洋学研究所研究例

会、平成十三年十月二十七日、東洋大学)

△調査活動▽

「大英博物館所蔵仏典写本の調査」(海外研究、平成十三年八月二十一日―三十日、ロンドンにて大乘仏典のサンسكريット写本及びチベット語訳写本を調査)

「スコイエン・コレクション所蔵サンسكريット仏典写本の調

査」(ノルウェーアカデミーの研究費による、J. Bratvig 教授などとの共同研究、平成十三年八月三十一日) 九月八日、オスロにてスコイエン・コレクション蔵の Vairachedika MSS を調査)

「東洋思想における心身観」(平成十三年度科学研究費による研究、研究分担者〈研究代表者〉菅沼晃)

「日本における死の受容—文学・仏教・キリスト教信仰にみる看取りの様態」(平成十三年度科学研究費による研究、研究分担者〈研究代表者〉高城功夫)

△教育活動

学内担当科目

学部 インド哲学仏教学演習 ①(朝霞、I部)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

仏教思想論Ⅰ(白山、乗入れ)

インド仏教史(朝霞、I部/白山、II部)

大学院 大乘仏教研究Ⅱ(前期)

△社会活動

財団法人仏教伝道協会英訳大蔵経編集委員会委員/財団法人東方研究会研究員

△大学・学部管理・運営活動

文学部内カリキュラム検討委員会委員/教職課程運営委員会委員/文学部内自己点検・評価委員/井上円了記念学術センター研究員(円了研究部門)/東洋学研究所研究所員

伊吹 敦

△著書

『禪の歴史』(単著、法蔵館、平成十三年十一月十日、A5判、四〇八頁)

△分担執筆

「禪宗」(単著、大久保良峻編著『新・八宗綱要—日本仏教諸宗の思想と歴史』法蔵館、平成十三年六月三十日、A5判、一四〇〜一七三頁)

△論文

「禪芸術論(二)」(単著、「春秋」第四二六号、平成十三年二月二十五日、A5判、二八〜三二頁)

「禪芸術論(三)」(単著、「春秋」第四二七号、平成十三年三月二十五日、A5判、三四〜三七頁)

「金春禪竹の能楽論に見る禪の影響—六輪—露説を中心に(上)」(単著、「東洋学論叢」第二六号、東洋大学文学部紀要」第五十四集、平成十三年三月三十日、A5判、三五〜六三頁)

「慧可と『涅槃論』(下)」(単著、「東洋学研究」第三八号、平成十三年三月三十日、B5判、二五五〜二七〇頁)

「禪芸術論(四)」(単著、「春秋」第四二八号、平成十三年四月二十五日、A5判、二八〜三二頁)

△学会活動

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会コンピュータ利用委員会委員／仏教思想学会幹事／早稲田大学東洋哲学学会会計監査／日本仏教学会／財団法人東方学会

△調査活動

「東洋思想における心身観」(平成十三年度科学研究費による研究、研究分担者(研究代表者:菅沼晃))

△教育活動

学内担当科目

学部 中国仏教史(朝霞、I部/白山、II部)

禅の思想と文化(白山、乗入れ)

仏教漢文講読(白山、乗入れ)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

仏教と社会(白山、乗入れ)

△社会活動

財団法人東方研究会兼任研究員

△大学・学部の管理・運営

文学部内情報機器関係小委員会委員／文学部内入試小委員会委員／東洋学研究所研究所員／印度哲学科図書委員

平成十三年度演習ゼミ活動報告

渡辺章悟

インド哲学仏教学演習① 朝霞

① テーマ「ウパニシャッドを読む」

② メンバー 後藤裕一郎(幹事)他、二年生六名

③ 活動報告

本年度のテーマであるウパニシャッドの講読を行った。特に前期はサンスクリットの発音に慣れらうため、カセットに吹き込んだウパニシャッドの有名なフレーズや『般若心経』の朗読などを毎回聴いてもらった。サンスクリット原文を完全に暗記するまでには至らなかったが、ストックフレーズなどある程度は全員で声を出して唱えられるようになった。このことは、言語としてのサンスクリットに習熟するという意味では有効な方法であったと考える。

毎回の研究発表は、学生の自主的発表に任せた。『チャンドーグヤ・ウパニシャッド』の一節ごとを参加者が分担して下調べを行い、日本語訳と文法的説明をしたレジュメを作成して、これに基づいて討議するというものであるが、ほとんどは教員の解説に終始した。例年通りのやり方ではあったが、これはサンスクリットの学習にはなるが、学生の主体的な学習意欲を育成することができないと判断し、後期は講読をやめ、学生のさらなる主体的な研究を引き出そうと意図して、完全な発表形式に切り替えた。

あらかじめ学生に研究テーマを設定してもらい、これに沿って毎回二人程度が研究テーマにしたがって研究成果(中間報告)を発表してゆくというもので、その際必ずハンドアウトを

作成して参加者全員の問題に答えることを義務づけた。

最初はテーマが決まらず、まとめ方もわからないという状況で、学生たちは四苦八苦していたが、これも産みの苦しみということになり、なかなか立派な研究報告を仕上げるに至った学生もいた。テーマ学習としては、ある程度の成果を修めたものと思う。

橋本泰元

インド哲学仏教学演習② 朝霞

① テーマ「ヒンドゥー教思想入門」

② メンバー 山田裕一(幹事)他 二年生十一名

③ 活動報告

昨年度と同様に、ヒンドゥー教の中心思想であるバクティ(信愛・帰依)思想を、『バガヴァッド・ギーター』のなかに見ていくことを課題とした。

本年度も、初期の動機付けとしてヒンドゥー教を概説する英語版ヴィデオを見せ、途中、担当教員が不足と思われる個所で文化的な解説を加えた。さらに前期にはインド文化に関するヴィデオ二、三本を見てもらい、インド文化への関心を高めてもらうことに努めた。

前期後半から、『ギーター』の概説と文法的輪読に入った。初めに『ギーター』の使用テキスト(ヒンディー語注付き流布本)と和訳・参考書などの紹介・解説を行なった。次いで、文法注

の解説書のある第一章を除き第二章から文法的読解の作業を輪読形式で開始した。本年度の受講者は格別熱心な人がいない代わりに、全般的にこの作業に取り組んだ。

例年ながら、インドの思想・文化に対するゼミ生の関心の程度と語学能力は千差万別であり、一つの演習ゼミとしてのクラス運営の難しさを感じざるを得なかった。

清水 乞

インド哲学仏教学演習① 白山(兼り入れ)

① テーマ「インド美学と芸術思想」

② メンバー 吉田泰則(幹事)・星たつ美(副幹事)他、四年生十七名、三年生二十一名、二年生四名、大学院二名

③ 活動報告

シラバスの通り、インド美学の基本であるラサ論の構造を理解するため、担当教員がこれを概説し、同時に参考資料として、上村勝彦著『インド古典演劇論における美的体験』の序章と『ナーティヤ・シャーストラ』第六章の和訳を各人に配布した。

この前提に立って、芸術鑑賞体験をラサ論によって分析した結果を各人が発表し、これを全体で討議した。

しかし、各人の芸術体験の幅が狭いためか、芸術分野の多様性に乏しく、インド芸術の分野からの主題提供がなかった。

そこで、主題の時空的制約と理論的制約を離れて、自由に個人の美的主張を議論することにしたが、担当教員による矯正の

必要を感じたので、ヴァールミーキの『ラーマヤナ』制作の動機の記述(岩本訳)を主題としてラサ論による分析を各人が発表、併せて該当部分のサンスクリット語テキストの解説をレポートとして課した。

卒論指導はゼミ活動の重要な柱であるが、各人の論題とゼミの課題との整合性が十分とはいえず、またオフィス・アワーの利用者が限定され、これを活用する学生は少なかった。

反省

ゼミのメンバーが四十六人という大所帯であり、加えてゼミ参加者の目的意識が十分でなかったため、ゼミの課題・方法・目的が参加者全員に浸透し難く、関心の濃淡が極端であった。芸術鑑賞体験に対する各人の反省と分析が極めて希薄であり理論に乗せることが困難であった。

反省の総括としては、むしろ、ディスカッションやディベートによって自主的に課題を収斂するよりも、担当教員が課題を整理して、ゼミ活動をリードするほうがよかったと思う。

菅沼 晃

インド哲学仏教学演習② 白山(乗り入れ)

① テーマ「インド思想の人間観」

② メンバー 木村伊沙子(幹事)・手島寛恵(副幹事)他、四年生二十名、三年生四名、二年生四名

③ 活動報告

1、このゼミの目的は、一つはサンスクリットをインドの伝統的な方法で学習すること、サンスクリット文献を用いてインドの人間観を明らかにすることの二つである。今年度は、インド人向けのサンスクリット入門書 *Sanskṛita-triṭyādarśan* を各班ごとに分担し、文法説明、および、内容の発表を行なった。

(一) 文学班: *Kalidasasya guruḥ (avītyo bhagah)* について講読発表、*Kalidasa* の文学の特色などについて研究発表。

(二) 哲学班: *Sṛiṣaṅkarācāryah* について講読発表、ついで、*Śaṅkara* の生涯、思想、*Śaṅkara* 派の現状、インド哲学への影響などについて研究発表。(三) 叙事詩班: *Sagara mahatājah* について講読発表、ついで、*Gaṅga* 下降伝説に至るまでについて発表。(四) 仏教班: *Buddha-devah* について講読発表、ついで、*Buddha* の異名について *Anarakośa* を引いて発表。インドのブッダ観と仏教のそれとの相違について発表した。

2、平成十三年八月三日(五日)、山中湖セミナーハウスにて夏期合宿研修(インド思想研究会、大学院ゼミと合同)を行なった。ゼミ四年生の卒論中間発表は、例年になくよくまとまった発表ができた。ついで、哲学班の *Śaṅkara* に関する発表、大学院生の自分のテーマに関する発表、懇親会があり、きびしいスケジュールであったが、充実した合宿であった。参加者は二日目で約五十名(ゼミ、研究会OB、OGを含む)。

3、平成十四年二月、ゼミ報告書作成。

今年度は四年生が実によく出席してくれたため例年になく充

実したゼミ活動ができた。しかし、四年生二十人、三年生四人、二年生四人というゼミ構成はアンバランスであった。

橋本泰元

インド哲学仏教学演習③ 白山(乗り入れ)

① テーマ「中世ヒンドゥー教思想研究」

② メンバー 野田康司(幹事) 他、四年生九名、三年生十三名、二年生一名

③ 活動報告

昨年度と同様に、『バーガヴァタ・プラーナ』において完成された民衆的なバクティ思想と、北インドにおける中・近世の民衆的なバクティ思想運動の展開を中心課題とした。

初めに、担当教員が新人ゼミ生を中心に使用テキスト(流布本で第十巻「ラーサの五章」と英訳、和訳、研究書およびヒンドゥー教関係の事典を中心とした参考書の紹介・解説を行なった。このテキストの輪読は、語学力増進を狙いおもに三年生を中心に一回一頃の割合で行なった。

この作業と併せて、原典読解に関心の薄いゼミ生のために、ヒンドゥー教女神に関する名著 David Kinsley, *Hindu Goddesses*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1987 の「ラクシュミー」章の輪読も同時進行した。インド思想・文化に関する卒論・卒業制作で邦語資料にばかり頼る安易な作業を避け、外国語文献を利用して欲しいと考えるからである。

本年度は、四年生の半数が授業中に卒論・卒業制作の中間発表を行った。また、八月二十一〜二十三日に豊丘セミナーハウスで、インド文化研究会との合同で合宿研修を行い、四年生二名の卒論中間発表と、三年生によるゼミ教材の輪読を中心に活動し、充実できた。

渡辺章悟

インド哲学仏教学演習④ 白山(乗り入れ)

① テーマ「大乘仏教の研究」

② メンバー 西谷晃博(前期幹事)・丸杉伊作(後期幹事) 他、四年生五名、三年生六名

③ 活動報告

本年度はインド大乘仏教最大の論師と謳われるナーガールジュナの『根本中論頌』をメインテキストとした。前期は最初に担当教員がインド中観派のスケッチ、およびナーガールジュナと『根本中論頌』について解説を加え、その後全員で本作品のサンسكريット原文を講読した。なかなか偈頌のみでは理解するのが困難であり、時にはチャンドラキールティの注釈などを用いながら説明に努めた。その文体と思想に慣れた後期から、参加者全員にそれぞれ担当する章を決めてもらい、その章を纏めて各自の理解に従ったナーガールジュナの中観思想について研究発表をもらった。

その際、発表者は必ずハンドアウトを用意し、参加者全員に

配布し、これをたたき台として、全員でナーガールジュナ思想の探求を行った。参加者は担当教員が期待していた以上に意欲的に取り組み、卒論にまで展開しようするような立派な発表を行った者もいた。

また、四年生には後期から卒論の中間発表をもらった。質問に対してはもう一度それに答えるというチャンスを作ったので、まとめ方の勉強とともに発表内容の精度を高めることも繋がったのではないだろうか。毎回のレポートに対しては、基本的に参加者全員が必ず一つ以上の質問をすることを義務づけていたため、発表者も聞く方も真剣であった。ただし、担当教員の指導と解説がどうしても多くなってしまうこと、半年以上の持続的研究が難しい者がでてしまうことに対してどう対処するかが、今後の課題である。

森 章司

インド哲学仏教学演習⑤ 白山（乗り入れ）

① テーマ「原始仏教研究」

② メンバー 丸山栄良（前期幹事）・酒井真理江（後期幹事）

他、四年生十五名、三年生十一名、二年生三名、大学院一名

③ 活動報告

共同研究と個人研究の二本立てで進めた。

共同研究は、前期は「原始仏教は客観的な世界としての地獄があると考えていたか、いなかったか」をテーマに「いた派」

「いなかった派」にグループ分けしてディベートした。その結論は以下の通りである。「天 (dewa)」や「餓鬼 (peta)」「悪魔 (maia)」「羅刹 (rakshasa)」にはリアリティが感じられるに比べて、地獄はどこか観念的で空想の産物という印象を与える。それは恐らく「地獄」には次のような特徴があるからと思われる。

- ・地獄には地獄という特定の世界があつて、その世界こそが地獄であり、そこから離れることは地獄でなくなることになる。だから「地獄の衆生」はこの世界に現れることにはできない。(畜生や餓鬼にはその住む特定の世界はない。天は特定の世界を持つてはいるが、我々の世界に現れることもできる)

- ・地獄に住む衆生は人や畜生、あるいは餓鬼や天などのように特定の「姿形」を持っていないと考えられる。地獄の世界(器世間)は描写されるのに、地獄の衆生は描写されない。おそらく人間の形をしていたのである。(だからその世界は人間世界の苦しみが投影されたものという印象もないではない)

そういう意味では、地獄は悪業の報いを受ける場所として、方便仮設されたものという印象もないではない。原始仏教時代の人々も、天や餓鬼や悪魔などのように、リアルに地獄を信じていなかったかもしれない。

しかし原始仏教においては、その存在証明はなされなくと

も、悪業を行うことの抑止効果として地獄は十分に機能していた。また誰それが地獄に堕ちたというような話を現実のものとして信じていた。したがって彼らには地獄は「客観的な世界」として存在していたと思われる。

後期のテーマは「大般涅槃經 (Mahāparinibhāna-sūtra)』は史実を忠実に伝えたものか、伝えたものでないか」であって、一人ひとりがレポートを提出したうえで意見を発表をするという形式を取っている。本原稿を書いている時点においてはまだまだとめの段階に入っていない。

個人研究は、卒業論文・卒業制作を視野においた自由研究であり、夏休みの合宿（九月十四・十五・十六日に、稲取セミナーハウスにて）と後期授業の最初の二時間に研究発表会と指導を行った。なお毎月第一週は原則として卒論・卒制の指導を行っている。

また三月末には『二〇〇一年度 森ゼミ紀要』を発行する予定であり第十号となる（第一号は別形式の冊子として制作したもので、これを入れると通算十一号となる）。

伊吹 敦

インド哲学仏教学演習⑥ 白山（乗り入れ）

① テーマ「禅思想研究」

② メンバー 丹野雄士（幹事）他、四年生九名、三年生三名

本ゼミは、中国仏教の中でも、最も中国的な性格を多分に持

つ「禅」を中心に、その思想の特質や成立、変化をたどってゆくことを目的とするものである。

今年度は新たな試みとして、年度はじめに学生と話し合いを行なって使用するテキストを決定することにした。こうして選んだのが『大応国師語録』である。日本の典籍をテキストにするのは初めてであるが、留学経験のある南浦紹明の著作であり、また、内容的にも宋代の禅語録を模倣しているため、日本のものという意識をほとんど持つことなく読むことができたし、こうしたものをほとんど読んだことのなかった私自身にとっても新鮮な体験であった。

内容が難解であるため、テキストには漢文の原本と併せて、日本語訳が附された「日本の禅語録」シリーズ所収のものも用いたが、多くの学生がその訳文にとらわれて、かえって正しい理解から遠ざかる傾向を示したことは今後の課題の一つである。ただ、こうしたことから、書籍に書かれた理解や説をそのまま鵜呑みにしてはならないという教訓を示し得たという点は利点でもあったと思う。

禅文献には独特の癖があるため、はじめはとっつきにくいのが、慣れれば、ある程度、理解できるようになるものである。実際、四年生は二年目であるだけに、昨年より、かなりの進歩が見られたような気がする。特に今年は、出席者は必ずしも多くはなかったが、積極的に発言する学生が多く、時として活発な議論が行われたことは特筆すべきである。

ゼミ活動のもう一つの柱である卒論指導については、例年通り、授業中での発表はなるべく差し控え、研究室での個別指導で対応しようと努めたが、学生の卒論への取り組みの遅さや、卒論に対する意識を高める工夫も必要であったかも知れない。

なお、本年度は、夏休みに課外活動として鎌倉の禅寺の参観を行ったが、学生の関心や意欲にかなりの問題があったように思う。

川崎信定

インド哲学仏教学演習⑧ 白山(乗り入れ)

① テーマ「唯識思想の基礎的原典の講読研究『唯識三十頌』」

② メンバー 佐藤エリカ(幹事)・石原草吉(副幹事)・中西

祥子(記録) 他、四年生七名、三年生十六名、二年生三名、

大学院二名

③ 活動報告

大乘仏教の重要教理の一つである唯識思想の基礎的原典の講読を通じてテキスト批判・文献取り扱いの基本を養成し、今後の卒論研究の基盤を作ることを目的としたセミナー。今年度も昨年度に引き続いて、四世紀ごろにヴァスバンドウ(Vasubandhu 世親)が著わした唯識思想の代表的な論書で、三十の韻文からなる『唯識三十頌』を取り上げた。上級生から下級生までが均等に入るように五班に分けて、毎回各班がサン

スクリット原文を担当する輪番制。当番はローマ字テキストとレジュメ翻訳を授業前にコピー配付して、授業中に「アラヤ識」などのテーマを決めて思想内容ディスカッションをした。夏の合宿は九月一日・二日に豊丘セミナーハウスで一泊二日をかけて四年生による卒論の執筆内容、「甘露」、「ことばと意味」、「欲望」、「悪趣清浄マンダラ」、「チベットの死者の書」の経過報告と花火大会。帰りのバス内では、「弥勒とは?」の共同討議で時間も忘れて議論白熱。気合いを入れた年二回のコンパとともに、出席のチェックと実力養成の鞭はかなり厳しかった。

平成十三年度開講科目

〈Ⅰ部〉

朝霞開講科目

インド宗教史

仏教学概論(仏教とは何か)

ヒンドゥー教概説

インド仏教史

中国仏教史

日本仏教史

サンスクリット文献講読①・②

インド古典講読(説話劇 Prāmāṇīkaka (第6幕)

をよむ)

菅沼 晃

森 章司

橋本泰元

渡辺章悟

伊吹 敦

竹村牧男

清水 乞

菅沼 晃

インド哲学仏教学演習①

渡辺章悟

インド哲学仏教学演習②

橋本泰元

インド哲学仏教学演習③ (凝然「八宗綱要」の講読)

佐藤 厚

インド哲学仏教学演習④ (サンスクリット語原典の講読と解釈)

読と解釈)

島田茂樹

白山開講科目

アビダルマ哲学

池田練太郎

ヒンディー文献講読

宮本久義

卒業論文(制作)

ヒンディー文献講読
卒業論文(制作)

宮本久義

△相互乗入れ科目▽

宗教学概論

川崎信定

比較宗教学(唯識思想と現在)

司馬春英

インド古典哲学

宮本久義

インド現代思想

宮本久義

インド文学

上村勝彦

インド・仏教図像学(インド・チベット密教図像へのアプローチ)

島田茂樹

インド文化論Ⅰ(インド芸術入門)

清水 乞

インド文化論Ⅱ

石川 寛

仏教文化論

権田・ソナム・ギャルツェン

仏教思想論Ⅰ

渡辺章悟

仏教思想論Ⅱ

川崎信定

仏教思想論Ⅲ

金子芳夫

ヨーガとその思想(講義と実践)

番場裕之

浄土教の思想と文化(元照「阿弥陀経義疏」を読みつ)

五十嵐明宝・石井義長

つ)

密教の思想と文化

眞柴弘宗

禅の思想と文化

伊吹 敦

法華経の思想と文化

小松邦彰

△Ⅱ部▽

インド宗教史

菅沼 晃

仏教学概論(仏教とは何か)

森 章司

アビダルマ哲学

池田練太郎

ヒンドゥー教概説

橋本泰元

インド仏教史

渡辺章悟

中国仏教史

伊吹 敦

日本仏教史

竹村牧男

日本思想史(外来思想との交流)

三澤勝己

サンスクリット文献講読(古典サンスクリット文法初級)

渡邊郁子

級)

インド古典講読

渡邊郁子

華嚴經の思想と文化

パリー文献講読

仏教梵語講読

チベット文献講読

仏教漢文講読

外国語文献講読

仏教と社会（仏教は社会とどう関わってきたか）

インド哲学仏教演習①（インド美学と芸術思想）

インド哲学仏教演習②（インド思想の人間観）

インド哲学仏教演習③（中世ヒンドゥー教思想研究）

インド哲学仏教演習④（大乘仏教の研究）

インド哲学仏教演習⑤（原始仏教研究）

インド哲学仏教演習⑥（禅思想研究）

インド哲学仏教演習⑦（鎌倉仏教の研究）

インド哲学仏教演習⑧（唯識思想の基礎的原典の講

読研究『唯識三十頌』）

小島岱山 清水 乞

石上和敬 橋本泰元

佐久間秀範 森 章司

川崎信定 森 章司

伊吹 敦 森 章司

村石恵照 村石恵照

伊吹 敦 伊吹 敦

清水 乞 清水 乞

菅沼 晃 菅沼 晃

橋本泰元 橋本泰元

横山 紘一 横山 紘一

小島岱山

石上和敬

佐久間秀範

川崎信定

伊吹 敦

村石恵照

伊吹 敦

清水 乞

菅沼 晃

橋本泰元

渡辺章悟

森 章司

伊吹 敦

竹村牧男

川崎信定

川崎信定

川崎信定

森 章司

森 章司

森 章司

森 章司

森 章司

森 章司

森 章司

森 章司

森 章司

森 章司

インド哲学研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅱ

インド哲学研究Ⅱ（中世インド思想研究）

初期仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（律蔵による釈尊

教団形成過程の研究）

初期仏教研究Ⅱ（パリー仏教研究）

大乘仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅱ（インド後期大乘

仏教論典原典研究）

大乘仏教研究Ⅱ（經典の批判的研究）

大乘仏教研究Ⅲ（『瑜伽師地論』を読む）

中国仏教研究Ⅰ（華嚴思想と中国初期禅思想との関係）

日本仏教研究Ⅰ（日本中世浄土教の研究）

博士後期課程

インド哲学特殊研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ（イン

ド哲学・仏教学の諸問題）

インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ（サン

スクリット語韻律論の研究）

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（律蔵の研究）

仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ（仏教と他派と

の思想交流）

仏教学特殊研究Ⅲ（華嚴思想と中国初期禅思想との関

係）

小島岱山 清水 乞

橋本泰元 橋本泰元

森 章司 森 章司

森 章司 森 章司

森 章司 森 章司

森 章司 森 章司

平成十三年度卒業論文

〈I部〉

- 大澤 幸郎 茶の湯の美意識を例にとった精神現象としての「美」
- 島 聡 『カタ・ウパニジャッド』における輪廻について
- 那須 洋一 『万民徳用』における鈴木正三の思想
- 佐藤由紀子 *Kangra Painting of Gita Govinda* におけるラーターの *singara* に基づく心情描写
- 金澤 亜紀 占星術文化—インドと各国の文化の対比
- 本間 崇 大正新脩大藏經の目次から見た発菩提心
- 松原 和宏 「甘露」に関する一考察と現代社会における甘露の役割について
- 和泉澤桐子 三十二相とその象徴
- 岸 由樹 初期仏教における医療
- 鈴木 尚司 シク教の教義とナーナクの思想
- 庭野 優樹 宗門内・外における宗祖観の相違の考察—一例として道元をとりあげる
- 堀川 慶子 観世音菩薩普門品第二十五における観世音菩薩の性格の特徴についての考察
- 増淵美智子 維摩経における空について
- 石田 卓也 ヴィシュヌ派の化身思想と歴史的展開について
- 芳岡 淳 *BUDDHISM AND ECOLOGY*, ed. by Martin-Bachelor and Kerry Brown, "Section A1. Even The Stores Smile" の翻訳
- 濱中由記子 『ウパデーシャ・サーハスリー—真実の自己』の探求』の研究
- 秋山 清香 ダサイン祭の研究—カトマンズ盆地・ネワール族による
- 柏川ゆかり 統一する神々—チャームンダー妃とシヴァ神
- 榎 朝子 宋初の禅宗教団のおかれた状況—『景德伝灯録』卷二十七の「禪門の達者」より見て
- 小山 勇氣 インド古典文学にみられる女性の装飾
- 佐々木かんな ウパニジャッドにおける夢・睡眠の考察
- 杉本 清佳 一角仙人物語の源流と展開
- 高桑 俊介 蓮如の研究—時代における蓮如
- 高野 早苗 ブッダの弟子たちの生き方
- 経澤 紀子 シヴァ神の異名とその神話物語—*Mahābhārata Rāmāyaṇa Purāṇa* などに見られるシヴァ神の異名
- 手島 寛恵 *Siva-purāṇa Rudra-saṁhitā, Parvatī-khaṇḍa* における *Siva* と *Parvatī* の関係
- 原田 尚子 近代インドの宗教・社会運動—*Ad Dharm* 運動について

本間 博子 ヴィヴェーカーナンダ全集より『ギーター』

2・3

山口 大介 山岡鉄舟の思想と禪の關係

山本 浩子 広隆寺宝冠弥勒についての私的考査

藤田 和央 臥坐具健度の比較対照表

桶舎 孝弘 弓と禪

中西 祥子 バルトリハリにおける〈語〉と〈意味〉

野沢 裕希 PURUSARTHAS IN THE WORKS OF KALIDASA—人生の三大目的、カーリダーサ

のカーマ観

岡 拓哉 北辰妙見の正体—妙見菩薩と稲城の民俗行事に見る星の信仰

星 たつ美 曼陀羅に関する英論文の和訳とその図解、および曼陀羅の立体化

渡邊ゆきえ 古典インドにおける「美しさ」について—『カーマ・ストトラ』を中心にして

助川美佐子 イスラム聖者廟としてのタージ・マハル—タージ・マハルと四つの建築

徳世菜穂子 『チベット死者の書』における死生観

星 晃子 シャンカラ及びラーマースジャの『バガヴァッド・ギーター』理解と注釈和訳

鎌田 美幸 原始仏教における諸仏の研究

小宮山真衣 チベット仏教における『時輪タントラ』の意味

白浜 久史 『バーガヴァタ・プラーナ』第十一卷—二十七章における至高神への礼拝次第

植木夕紀子 インド思想における生きながらの解脱

— *Anupūria upanīśad* を中心にして

但野沙矢香 「悪趣清浄マンガラ」の世界観

加藤 顕裕 原始仏教の河川について

井上 裕介 マハトマ・ガンディーの宗教観について

山本 成彦 唯識論の今日的役割と意義—「ころろ」の問題と他者との関わり

鈴木 佑香 シク教における宗教の普遍性

望月 俊生 阿修羅の果て

鈴木 律子 禪と軍国主義—皇国禪形成の歴史にみる禅思想の持つ危険性

佐藤 陽子 成唯識論における末那識と煩惱についての考察

鈴木 雅美 ガンディーの教育思想

赤坂 史人 *Kaśyapa-parivāra* (迦葉品)における菩薩像と如来蔵思想

西谷 晃博 中論第24章に見られる龍樹の「勝義」への態度について

〈II部〉

柳井 猛晶 殺生石伝説成立の分析—三時代から見る人と異界との關係

清水 博昭 大慧書における世法仏法の一体化

小林 愛 『三教指帰』—何故仏教だったのか

牟田 陽一 「能」に表れる日本人の「人の道」

直野 隆介 親鸞と妙好人

丸山 栄良 福島県会津地方にみる「おんは様」信仰につ

ての考察

今田美枝子 仏教におけるの死後の世界観—輪廻の天界につ

いて

根岸 剛 デーヴァナーガリー文字 Ture Type フォント

大内 裕貴 *Rigveda* における最高神格としての asura

加藤 奈奈 『マヌ法典』における女性像—「ヤーチュニヤヴ

アルキヤ法典」と比較して

木村伊沙子 アーユルヴェエダにおける日常と季節の過ごし

方—アシクターンガサングラハ

小町 順 『夜船閑話』における丹田の思想

佐藤エリカ 欲界と衆生—阿含経から俱舍論まで

千本木 智 THE BUDDHA AND HIS DAMMA にみる

アンヘードカルの仏教観

吉田 泰則 演技の裏に見る観察と描写、そしてコミュニケ

ーション考

小坂 誠 ジャータカに見られる自己犠牲性について

大学院修士論文

今野 道隆 律蔵における役職の研究—パーリ律と

attakathaを中心として

石塚 良哉 吉祥天法の研究

奥野 聖子 PALLATTHAKATHA 資料に於ける仏弟子

像

東洋學論叢

(東洋大學文學部紀要 第55集)

印度哲學科篇

平成十四年三月二十日 印刷
平成十四年三月二十日 發行 [非売品]

發行所 東洋大學文學部

東京都文京区白山五丁目二八番一〇号
電話 印度哲學科(九四三)三三三

印刷 日新印刷株式會社

東京都文京区大塚五丁目二十五番一十七
電話 〇三十三九四三二一四二一

BULLETIN OF ORIENTOLOGY

Bulletin of the Faculty of Letters
Toyo University

NO. 55

March, 2002

Series of
INDIAN PHILOSOPHY

XXVII

CONTENTS

- IBUKI, Atsushi : The Zen Influences on Komparu Zenchiku's
Theory of Noh (Part 2)(1)
- SHIMIZU, Tadashi : Indian Melodic Patterns and their
Rañjanic (Coloring the mind) Function(119)
- SUGANUMA, Akira : A Japanese Translation and Notes of the
Siddhāntakaumudī, Kāraṅkarakarāṇa (VIII)
— The Meanings and Usages of the Sixth Case
(*śaṣṭhī vibhaktih*)(174)
-

Published by
TOYO UNIVERSITY
Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo